

7. おわりに

1年という短い期間であったが、初めて海外で生活をして強く感じたことは、一度外から、自分の国を見ることは非常にいい勉強になるということである。日本人が

米国留学雑感

後藤 邦夫

住友金属工業(株)鉄鋼技術研究所製板研究室

1. はじめに

1990年8月から1年間、米国ジョージア州アトランタにあるジョージア工科大学(通称 Georgia Tech)の機械工学科 W. O. WINER 教授の研究室に留学する機会に恵まれた。活気あふれる米国南部の近代都市アトランタにおける著者の経験とその印象について述べてみたい。

2. アトランタ

アトランタは、ジョージア州北部のほぼ中央に位置し、アパラチア山脈の南端につながるピートモント台地に広がる米国南東部最大の高原都市であり、別名「森の都」とも呼ばれている。アトランタ都市圏の人口は、およそ270万人であり南東部では、マイアミ都市圏に次いで人口の多いところである。当地は、米国の象徴の一つ、コココーラの発祥の地としても有名でコココーラ社が本社を構えているほか、世界の出来事を24時間タイムリーに伝えてくれるCNNセンターの本部があるなど米国南部の産業の中心としてもたいへん注目されている。著者の留学中だけでも、1996年オリンピック開催地に決定、Georgia Tech フットボールチーム全米 No. 1、ボクシング世界ヘビー級チャンピオン誕生などと話題に事欠くことがなかったほどである。しかし、マーガレット・ミッチェルの小説「風と共に去りぬ」の舞台もなったあの Peachtree Street にも今や高層ビルが林立し、アンティペリウム風(南部独特の建築様式)の白亜の大邸宅やマグノリア(タイサンボク)の美しさといった古き良き南部の面影を、あまり見ることができなくなったのはなんとも残念である。現在でも、この永遠の名作「風と共に去りぬ」のヒロイン、スカーレット・オハラが愛し続けた大地、タラのイメージをいだいてアトランタを訪れる日本人観光客(約2万人/年)の数も絶えないと聞く。

当然のこととと思っている事柄を、外国人はどう感じているのか、日本人は特異な民族なのかというような、日本では考えないようなことを考える機会となった。そして、自分がいかに典型的な日本人であるかということを確認した。

3. ジョージア工科大学

スパゲッティのように高速道路がかけめぐるダウンタウンの北の端に位置するジョージア工科大学は、工学部(8学科)、理学部(8学科)、建築学部(2学科)、経営管理学部から成る南部最大の工科大学(学生総数約1万2千人)であり1885年の創立以来、南部での技術の中心として活躍している。工学部の中では、電気工学科が特に世界的に有名である。著者が在籍した機械工学科の Tribology & Rheology Research Lab. は、総勢30名でその人員構成は、9名の Faculty/Staff、3名の企業派遣研究員、18名の大学院生であった。Georgia Tech は、海外留学生を積極的に受け入れており特に中国、韓国などからの Ph. D. 取得を目的とした留学生の数はかなりにのぼるものと思われる。従って、当研究室も例外ではなく米国人はわずか4名で、韓国人4名を筆頭に中国、日本、フランス、オランダ、ノルウェー、イスラエル、イランなどといった多国籍研究室であった。Georgia Tech 機械工学科において、Ph. D. を取得するためには以下のようなハードルを次々に乗り越えていかなければならない。すなわち、あるレベル以上の学業成績を修めた上で、機械工学の三つ以上の学問分野(流体力学、熱力学など)に関する筆記試験と自己の研究分野に関する口頭試験(3回不合格になると再試験は認められない)に合格し、さらに Proposal(研究概要を教授に提案)が認められて初めて研究活動に入ることができるのである。日本人が、Language barrier の問題を十分克服したとしても Ph. D. を取得することが、いかに難しいか理解していただけたらと思う。

4. 日常生活

車社会の発達した米国においては、どこに行くにも車が必要になる。都市部の片側5車線にも及ぶ高速道路を10mileも走ると、到るところに散在したバーストタイヤや数多くの故障車を目にするようになる。さらに、各車まちまちのスピードで好きな車線を走るため慣れない日本人ドライバーにとって高速道路は危険極まりない。

しかし、日本に比べ広くて渋滞もなく、しかもカーブも少ない米国の高速道路は、運転による疲労度が日本とはまるで違うことを実感したものである。

ほとんどの米国の家庭は、1週間に1回程度の割合で

談話室/国際フォーラム

Grocery store に行くことが多く皆、車のトランクいっぱいになるほど食料品を買って帰る。しかし、それだけ買っても高々 \$60 程度と驚くほど安い。これは、食料品に限ったことではないのだが、例えば、米、牛肉、果物などを日本の価格の 1/5 程度で手に入れることができるのである。技術大国、経済大国になった日本ではあるが、国の豊かさという点ではまだまだ米国の比ではないことを痛切に感じたしだいである。

5. おわりに

今回の留学で一番印象に残っているのは、米国人は法律上の問題は別にしても米国で生活している以上、彼がどこの国の出身であろうと、仮に英語が十分にできないとしても米国人として扱ってくれるということである。

つまり、いかに保守的なアトランタといえども多民族国家である米国人にとって、そういうことはほとんど問題視されないのである。アメリカにいるものは、皆兄弟といったのりなのである。これは、島国日本に育った者にとってたいへんな戸惑いを感じる部分であるが、今後日本が摩擦を起こさずに国際社会にとけ込んでいくためには「郷に入っては郷に従え」の精神で克服しなければならない問題であると思う。

湾岸戦争のようになにかと話題の多い一年間であったが、米国という国の懐の深さや南部の人々のサザンホスピタリティーにも触れる機会を得られたことは、たいへん幸運であった。今後も古き良き南部の気質を残しつつ発展し続けるアトランタに注目していきたい。

の間本報告に述べられているように、十分な成果をあげて、同年 11 月 14 日をもって解散することになった。

このような経緯で十分な成果があげられたのは、もちろん優れた団員に恵まれたということにもよるが、協定の存在した期間に先輩諸兄が払われた努力の蓄積によるところが極めて大きいことを痛感した。ここに、心から敬意を表します。
(菊池 實)

日本・チェコスロバキア技術交流会報告

日本・チェコスロバキア技術交流会代表団

2. 団員の構成

東京工業大学工学部教授	(団長)菊池 實
川崎製鉄鉄鋼研究所主任研究員	(副団長)斉藤 良行
新日本製鉄鉄鋼研究所研究員	松橋 亮
NKK 鉄鋼研究所主任部員	南 雄介
住友金属工業鉄鋼技術研究所主任研究員	榎木 義淳
住友金属工業鋼管製造所鋼管技術部課長	加藤信一郎
神戸製鋼所高砂鋳鍛鋼工場技術部主任部員	高野 正義
	飯久保知人
	田中 泰彦
石川島播磨重工業技術研究所課長	木原 重光

3. 訪問日程

10 月 12 日 (Praha)
 13 日 (Praha)
 14 日 Válcovny Trub (Chomutov) (第 1 班)
 POLDI Iron Works (Kladno) (第 2 班)
 15・16 日 Czech and Slovak-Japan Technical Exchange Meeting "Steel Products and Properties for Fossil Fuel Power Generating Plants and Chemical Equipment"
 (Frýdek-Místek)
 17 日 Vítkovice Steel Works (Ostrava)
 (第 1 班)

1. 経緯

日本鉄鋼協会は 1975 年から 1987 年の 13 年間にわたってチェコスロバキアの The Iron and Steel Industry General Management との間に 2 国間交流協定を結んでいた。この間 5 回にわたって日本・チェコスロバキアシンポジウムが開催されている^{1)~3)}。しかし、この協定に基づく会議は 1987 年 3 月 18・19 日東京で開催された第 5 回シンポジウムが最終のものとなった。この第 5 回会議の席上で、この会議でこれまでの交流を完全に終わりにしてしまうのは残念であり、適当な時期にチェコスロバキアでこれまでと同じような会議を開催したいとの意向が、チェコスロバキア側から表明されていた。その後、チェコスロバキア大使館を通じて、協会に打診があり、第 5 回会議と同様な主題で日本・チェコスロバキア技術交流会を 1990 年 9 月に開催したい旨の要望が文書で提出された。

この問題は国際交流委員会で検討され、i)協会としては正式な交流会を再会することはしない、ii)交流に関心が示され、訪問団が組織された場合は、その訪問団と先方との折衝などに関する事務的な援助は協会が行う、との結論を得た。その後、1990 年 8 月以来 4 回の懇談会を通じて、日本・チェコスロバキア技術交流会が発足した。この交流会の訪問団は、1991 年 10 月 12 日から 18 日までチェコおよびスロバキア共和国を訪問し、こ